様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520346
研究課題名（和文）
日本語とフランス語における、否定極性項目を含み、驚き・感嘆を表す構文の研究
研究課題名（英文）
A study of constructions in Japanese and in French including a negative polarity item and conveying a surprise or an exclamation

研究代表者
金子　真（KANEKO MAKOTO）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：00362947

研究成果の概要（和文）：
本研究では次の２点を主張した：i)「太郎ナンカが来た」、「太郎が亡くなったナンテ」といった日本語の文では、不定語を含むナンカ・ナンテが、否定極性項目と同様、個体や出来事の選択肢の領域を拡張することによって、低評価、驚きなどの情意性が生じる；ii) Michel qui est mort ! (Michel that died!)といったフランス語の名詞文も quoi (what)に相当する非明示的不定語を含み、これが出来事の選択肢の領域を拡張することによって驚きの意味を生じる。

研究成果の概要（英文）：
This study shows i) that the derogatory or exclamatory meanings conveyed by Japanese examples, like *Taro-NANKA ga kita* (‘The like of Taro came’) or *Taro-ga nakunatta-NANTE* (‘What? Taro died?’) are due to fact that NAN-KA (what-or) or NAN-TE (what-quotation) widen, in the same way as Negative Polarity Items, the domain of alternatives consisting of individuals or events, and ii) that French nominal sentences, like *Michel qui est mort !* (‘Michel that died!’), equally include an implicit WH word, *quoi* (what), which serves as domain widener and gives rise to a surprise meaning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	600,000	180,000	780,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：否定極性項目、驚き、感嘆、低評価、名詞文、不定語、量の原則

１．研究開始当初の背景

日本語には、(Ia)、(IIa)の下線部にみられるように、不定語ナンを含み低評価、驚きなどを表す表現が見られる。しかしこうした表現は従来、取り立て詞、終助詞など異なる文法範疇に分類され、関連づけて論じられることが少なかった。

(I)a.　太郎<u>ナンカ</u>がやって来た。
　b.　Un étudiant <u>quelconque</u> est venu.
　　‘A student QUELCONQUE came.’
(II)a.　太郎が亡くなった<u>ナンテ</u>。

b. Michel qui est mort !
'Michel that dies !'

興味深いことに、フランス語でも(Ia)と同様の「低評価」を、不定語 (あるいは WH 句) quel (which) を含む決定詞 quelconque で表すことができる。また(II)と同様の「驚き」を、フランス語では(III)のような名詞文で表現することができる。

フランス語学の分野では、(Ib)における低評価の意味の派生に関しては、Jayez & Tovena 2006. (Epistemic Determiners, *Journal of Semantics*, *23*: 217-250.)などで論じられているが、(II b)のような名詞文がどのようにして驚きを表すのかについて、十分明らかにされてこなかった。

２．研究の目的

このような従来の研究状況を背景に、本研究は、次の２つの問いに答えを与えることを目的とした。

(1) (Ia.b)に見られるナンカと *quelconque* に関して:① 両者はどのようにして「低評価」(ex. 不適当な太郎 / 取るに足りない学生) を表わすのか？:② 後者は「話者の非同定」(ex. どの学生かわからない) も表すが、前者はこうした意味を表わさない。こうした相違点はなぜ生じているのか？

(2) (IIa)のような終助詞ナンテと(IIb)のような名詞文に関して：①不定語ナンと助詞テは「驚き」を表す上でどのような役割を果たしているのか？；②「驚き」の意味を表すことを可能にしている、ナンテを含む日本語の文とフランス語の名詞文の共通点はなにか？

３．研究の方法

本研究では、上記の(1)、(2)の問いに答えるために、次のようなアプローチをとった。

(1) フランス語の *quelconque* など epistemic determinerと呼ばれる決定詞に関して提案されてきた分析を、日本語のナンカに援用しつつ、両者の違いも説明した。その際特に、Kratzer & Shimoyama 2002.(Indeterminate Pronouns: The View from Japanese, In Otsu, Y. (eds) The *Proceedings of the third TCP*, Hitsuji Pub. Tokyo: 1-25.) などの先行研究によれば、epistemic determinerは命題の選言を導入すること、ナンカのカも基本的に選言を表わすことに注目した。

(2) (IIa)のような不定語を含む文と(IIb)のような名詞文の関係は、(IIIa)と(IVa)のような不定語または WH 句を含む感嘆文と、(IIIb)と(IVb)のような名詞的感嘆文の関係と類似することに注目した。Zanuttini & Portner 2003. (Exclamative Clauses: at the Syntax-Semantics Interface, *Language, 79.1*, 39-81.)によれば、(IIIa)における感嘆の意味は、①叙実性（ex. 花が実際に非常にきれいなこと）と、②WH 句が担う領域拡張(ex. 当面する花の美しさの程度が、想定していた程度の集合に見つからないこと、すなわち当面する美しさの程度を含むためには、程度の集合を拡張しなければいけないこと)、により生じる。

(III)a. Quelles jolies fleurs tu as !
'What beautiful flowers you have!'
b. Les jolies fleure que tu as !
'The beautiful flowers that you have!'
(IV)a. なんてきれいな花！
b. きれいな花！

また Zanuttini & Portner 2003 によれば、(IIIb)のような名詞文は関係節を含んでおり、関係節化に伴ない生じる非明示的な WH operator が、(IIIa)の明示的 WH operator である *quelles* ('what') と同様、美しさの程度に関する選択肢の集合の拡張を行う。

本研究ではこうした先行研究を、(IIa,b)のような出来事に対する驚きを表す文に構文に援用することを試みた。

４．研究成果

(1) まずフランス語の *quelconque* やドイツ語の *irgend* などの epistemic determiner に関する先行研究 (前述の Kratzer & Shimoyama 2002; Chierchia 2006. Broaden your views: Implicatures of Domain Widening and the "Logicality" of Language, *Linguistic Inquiry* 37.4: 539-590.) によれば、例文(Ib)*Un étudiant quelconque est venu.*は、例えば候補となる学生の選択肢の集合が{太郎, 花子}であるとき、２つの命題の選言、すなわち「太郎が来た∨花子が来た」として書き換えられる。

そして 2 つの選択肢が文脈上関与的である場合、量の原則に従い、「もし話者がより情報量の高い命題、すなわち「太郎が来た」こともしくは「花子が来た」ことが真であると知っていたら、そのように述べたはずだ。従って、より情報量の低い命題の選言を述べたということは、話者はどちらが来たか知らないと推論できる」という含意、すなわち「話者の非同定」の意味が生じる。

さらにフランス語の*quelconque*やドイツ語の*irgend*は、どの選択肢も関与的でない場合に使うこともでき (cf. Aloni 2006. Expressing ignorance or indifference. Modal implicatures in BiOT. In Cate, B. ten. & H. Zeevat (eds.) *TbiLLC 2005* LNAI 4363, Springer-Verlag: 1-20.)、その場合、上記の(Ib)では「太郎が来たことも花子が来たことも、文脈状関与的ではない」、

すなわち「やってきた学生は文脈上関与的ではない」という低評価の含意が生じる。

ところで、ナンカは不定語ナンと選言を表わすカを含み「太郎ナンカ」は「太郎やナンカ」と書き換えられる。また、奥津 1996. (『拾遺日本文法論』ひつじ書房) などが指摘するように「コーヒーや紅茶やナニカ」といった表現では、最後の不定表現が含む助詞（ナニカの場合はカ）によって等位接続された要素間の関係が決まる。

こうしたことを考慮し、本研究では、(Ia)「太郎ナンカが来た」において、ナンカは「太郎」の選択肢を表し、この文は「太郎が来た∨ナンカが来た」と書き換えられる、と提案した。

さらにこの場合、太郎の選択肢は人であるはずだが、その選択肢を表すナンカはダレカのように[+human]の素性をもたない、いわば選択肢の素性を拡張した形式をとることに注目した。そして、そうした選択肢の拡張のために、ナンカには「文脈上関与的でない」という低評価を表す語彙的意味が加わる、と主張した。さらにこうしたナンによる素性の拡張と情意性の獲得は、(Va)に見られるナゼの代わりによりナニを使ったとき、非難の意味などの情意性が加わることと平行的であると論じた。

(V)a.　なぜサボっているんだ。
　　b.　ナニ（を）サボっているんだ。

さらに Simons 2005. (Semantics and Pragmatics in the Interpretation of *or*.*SALT 15)* によれば、選言には、「個々の選択肢（(Ia)においては「太郎」と「ナンカ」）は文脈上の関与性において平行的でなくてはならない」という原則が課されるが、この平行性の原則により「太郎」も「ナンカ」が表わす選択肢と同様、非関与的であるという含意、すなわち「太郎」に対する低評価の意味が生じる、と論じた。

こうした本研究の仮説によるとナンカは、選択肢の集合の領域拡張を行うという点で否定極性項目と共通点をもつが、この仮説は、先行研究の例、また自らの収集例を見ると、ナンカが低評価を表すのは、ほとんどの場合否定文、疑問文、条件文の前件など、否定極性項目が認可される環境であることからも裏付けられた。

(2)①まず例文(IIa)の「太郎が亡くなったナンテ」に関し、終助詞ナンテを、引用を表すテを含む問い返し疑問文（ex.「ナニを勉強してるッテ」、「ナンだッテ」）と平行的に捉えることを提案した。

ところで Ginzburg & Sag 2000. (Interrogative Investigations. CSLI.) によれば、問い返し疑問文は、i) 相手の発話が聞こえなかった時、ii) 相手の発話中の語彙が理解できなかった時、iii) 相手の発話内容が予想に反する時、iv) 相手の発話の関連性がわからない時、に発されるが、本研究では、終助詞ナンテの場合は iii) の場合にあたると指摘した。そして、不定語ナンが、当面している事態が予想していた事態の選択肢の集合に見当たらないこと、すなわち当面する事態を含むためには選択肢の集合を拡張しなければならないことを示す、と主張した。

さらに、引用の形式を用いることで、当面している事態が、他から真として伝えられた情報であること (叙実性) も示される。このように、(IIIa)のような、WH 句を含む程度に関わる WH 感嘆文におけるのと同様、不定語ナンにより領域拡張が、そして引用のテにより叙実性が満たされることにより、驚きの意味が生じる、と本研究では主張した。

②次に(IIb)の *Michel qui est mort !* のようなフランス語の名詞文に関して、この構文は単一判断を表し出来事を焦点化する構文であると提案した。その際、主語が焦点化されているという見かけとはことなり、意味的には文全体が表す出来事が焦点化されていることを示すために、i) 接続詞の前に動詞の目的語に当たるものはこないこと、ii) 接続詞の前の名詞句が、従属節動詞に従属する解釈を受けること、iii) 英語における、強勢アクセントによる出来事の焦点化構文と同様の振る舞いを示すこと、などを挙げた。

そして、焦点化構文であることによって、非明示低 WH オペレーター（日本語のナンテに相当する）を含み、これが出来事の選択肢の集合（すなわち話者の想定する出来事の選択肢の集合）が喚起すると提案した。また、発話状況から当面する事態が真であること、すなわち叙実性が、保障されると示唆した。

さらに話者は、当面する事態が真であることが明らかな状況で、ことさらに事態の選択肢を喚起する焦点化構文を用いることによって、当面する出来事は、自分が想定する出来事の集合には見出されない、すなわち当面する事態を含むためには選択肢の集合を拡張しなければならないことを示している、と主張した。

こうした仮説に寄れば、(IIa)の終助詞ナンテの場合と同様、(IIb)のような名詞文においても、領域拡張と叙実性が満たされることにより、驚きの意味が生じることになる。

さらに、名詞構文が空のオペレーターを喚起するという仮説はまた、名詞構文は(VIa)に見られるように先行文に対し逆接的意味を表すことがあり、こうした意味は(VIb)にみられるような WH 語句を含む逆接の接続詞 *quoique* (‘although’) と類似していること、も

説明することができる。

(VI)a. Nous sommes à la gare, déjà ! Moi qui avais encore tant de choses à vous conter
'We are in the station already. Me that had yet a lot of thing to talk to you!'
b. Quoiqu'il pleuve, il vient.
'Although it rains, he comes.'

このように本研究は、(Ia)の取り立て詞ナンカ、(IIa)の終助詞ナンカ、(IVa)の感嘆の副詞ナンテは、文法カテゴリーは異なるが、どれも不定語ナンを含み、これが個体、出来事、程度に関わる選択肢の集合の領域拡張という、類似の機能を果たすと論じた。

さらに研究を進めていく中で、次のような興味深い問題が発見された。

(3) ナンカと複数性
報告者は、日本語の「複数」表示タチ / ラに関しても研究を行い、その過程で、日本語の歴史において、あるいは現代日本の様々な方言においてナンカとタチ / ラの機能が重なることがあるという知見を得た。例えば、(VIIa)に見られるように、上代日本語のラは低評価を表わし、(VIIb)に見られるように、現代高知方言のラ—はナンカと同様低評価を表わす。更に現代奄美方言においては、(VIIc)に見られるように、ナンカがタチと同様の複数の意味を表わすことがある（cf. 水谷& 斉藤 2007.「方言との接触による標準語形式の意味・用法の研究」『日本語文法』7.2: 65-82.）。

(VII)a. 憶良ラは今はまからん。
b. わしラーにはわからん。
c. うちの子供ナンカ見なかった？

さらにナンカをロマンス系言語の決定詞と比較し考察していく中で、イタリア語の epistemic determiner である *qualche*＋単数名詞は、(VIII)に見られるように複数を表すという知見も得た (cf. Zamparelli 2007. On Single Existential Quantifiers in Italian, in Comorovski & von Heusinger (eds.). *Existence: Syntax and Semantics*. Dordrecht: Springer: 293-328.)。

(VIII) Ho incontrato <u>qualche</u> compagno di scuola.
'I met some schoolmates'

今後、取り立て形式ナンカを「低評価」以外の「例示」の用法 (ex. 「誰が来るだろうか？ー太郎ナンカが来るだろう」)も含めたより広い角度から理解するためにも、また複数性という概念の一般言語学的意味づけを見直すためにも、日本語のナンカ、タチ / ラ、さらにイタリア語の *qualche*+単数名詞との間の類似点と相違点をより細かく規定することは興味深いと思われる。

(4) 非項位置の不定表現ダレカ・ナニカ
取り立て詞ナンカについて検討を進めていく中で、「学生がそこにダレカいませんか？」といった不定代名詞の用法が問題となった (cf. Kamio, A. 1973. Observations on Japanese Quantifiers, *Descriptive and Applied Linguistics*, 6 :69-92.)。
こうした構文は、統語的には、「学生がそこに３人いた」といった遊離数詞構文と部分的に似た振る舞いを示し、また意味的にはフランス語の *quelconque* と同様、「話者の非同定」を示す。またこれと類似の意味を、「ダレカ学生がそこにいませんが」といった構文でも表せる。
今後、上記の 2 つの構文において、統語的にダレカは名詞句外にあるのか、また意味的には、どのようにして「話者の非同定」の意味が生じるのか、明らかにする必要がある。現在、こうした研究を進めているところであるが、この問題は、西欧語においては名詞句内の決定詞が果たしている役割を、日本語などの無冠詞言語においては、名詞句外の要素が果たすという可能性を考える上でも興味深いと考えられる。

(5) フランス語と日本語の名詞文の対応
(IIb)のフランス語の名詞文と同様、(IXa)のように、日本語の名詞文も出来事に対する驚きを表わすことがある。こうした構文は喚体句と呼ばれ、これまでにも多くの研究が積み重ねられてきた。

(IX)a. 敷石の上を飛び跳ねるように走る電車。(朝日新聞 2003/8/20）
b. いまや一般世帯の４割がもつというビデオカメラ。(朝日新聞 2009/9/6)

しかし実例を詳細に検討すると、(IXb)のように、必ずしも一時的な出来事を述べず、驚きなど情意性を示さない名詞文も存在する.。
今後フランス語と日本語の名詞文を比較し、明確な基準を設定しつつ、両言語の名詞文を分類していくことも興味深いテーマであると考えられる。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（総件数　計４件）
① <u>Makoto Kaneko</u> 、Les phrases nominales événementielles exprimant une valeur affective,

Makoto Kaneko, *Actes de Congrès Mondial de Linguistique Française (CMLF)*、査読有、2008、pp. 2055-2072.
www.linguistiquefrancaise.org/10.1051/cmlf08135
② Makoto Kaneko 、 Free-Choiceness and Grammaticalization, In Jayez, J. & L. Tovena (eds.). *Proceedings of the Free Choiceness workshop (ESSLLI 2008)*、査読有、2008、pp.13-22.
http://elico.linguist.univ-paris-diderot.fr/FCesslli08proceedings.pdf
③ Makoto Kaneko 、 Pronoms indefinis et grammaticalisation : quelques enseignements du japonais, Makoto Kaneko, *Modéles Linguistiques* tome XXVIII-2. vol.56、査読有, 2007、pp.37-57

〔学会発表〕（総件数　計 10 件）
① Makoto Kaneko 、 Epistemic 'determiner' outside nominal projections in Japanese、8ème Colloque de syntaxe et sémantique de Paris、2009/9/24、パリ（フランス）。
② Makoto Kaneko 、 Full-fledged and grammaticalized indefinites conveying ignorance, derogation or anti-exhaustiveness in Japanese、19th Colloquium on Generative Grammar 、2009/4/1、ヴィトリア・ガステイス（スペイン）。
http://www.kongresuak.ehu.es/p275-content/en/contenidos/informacion/generative_grammar09/en_inf/adjuntos/Handout%20MAKOTO%20KANEKO.pdf

〔その他〕
特になし。

６．研究組織
(1)研究代表者
金子　真（KANEKO MAKOTO）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：00362947
(2)研究分担者：なし
(3)連携研究者：なし